

地方連合音楽委員会ネットワーク

地方連合音楽委員会の働きをご紹介するネットワーク、今回は福岡地方バプテスト連合音楽委員会主催の研修会をご紹介します。題して、「贊美歌創作研修会」。

この研修会を通して気づかされた、或いは迫られた私たちの課題とは何だったのでしょうか。報告を通して全国の皆様と分かち合いたいと思います。

《当日プログラム》 2011年10月1日（土）10：00～15：30 於：平尾教会

10：00～11：30 開会礼拝/基調講演「教会に仕える贊美歌創作」

（基調講演講師：岩崎光洋・福間教会自由ヶ丘伝道所）

11：30～12：30 昼食

12：30～15：00 ワークショップ

A：作詞部門担当・踊真一郎・久留米教会

B：作曲部門担当・岩崎光洋

15：00～15：30 閉会礼拝（ワークショップでの作品発表あり）

福岡地方バプテスト連合音楽委員会主催 贊美歌創作研修会 報告

加藤 美代子（委員長／姪浜）

1. 準備

福岡地方連合教会音楽委員会は、初の試みとして贊美歌創作研修会を行いました。年度当初、活動方針を決めるために話しあった結果、2年間を通じて贊美歌創作を追求しようということになりましたが、だからといってその専門家が委員にいるかというとそうではありませんでした。委員手ずから話し合いを重ね、連合の需要と自分たちのやりたいことを探り、想像力を生かして思ったことを表現しあい、聞き合い、それぞれ自己研修を重ねて委員会で紹介・発表し合いました。「私たち」主語の贊美歌を作りたい、教会の歌を作りたいという強い希望がありました。

その結果、研修会では、まず「贊美歌とは」「贊美するとは何か」から問い合わせ直し、創作することの歴史や意味をおさえた上での動機付けが必要ということを確認し、午前中に基調講演を行い、午後は作詞、作曲分団に分かれてワークショップ、および発表ということにしました。

2. 研修会を終えて一委員長所感

このような試みは初めてのためおつかなびっくりでしたが、反面この働きは必要という意識が委員を動かして実現したと思います。他教派でも今贊美歌創作の気運が高まっていると聞きます。

講演で強調された、会衆贊美創作による教会形成の可能性は実際作られてみると現実となりません。そこでそれを訴え、作成の応援をし、発表の場を設けるなど、すでに委員会で計画している事柄を行っていくことが大切です。良い贊美歌は教会の信仰を深

め、問い合わせし、新たなものにする。教会の力となり、同時に内から教会を動かします。勧められたように、今の自分の殻を破り、生み出す努力をしてみたいものです。

聞いていて大変な迫りだと思ったのは、「教会員への聞き取り」だと感じました。自分の信仰ばかりでは独善的な作品になります。教会の賛美歌を作るためには、書く人は自分たちを代弁して賛美歌を作ってくれているという意識が教会の中にあり、書く人も謙虚に共同体の声に耳を傾ける必要があります。その人はとりかかった後に大いに成長させられるのではないかと思いますが、聞き取り、いろいろな方の信仰と向い合って声にまとめる過程はしんどい面があるかもしれません。講演者は賛美歌創作は召命がなければできないといい、説教と似ているとの指摘がありました。これから私たちのほとんどがまだ出会ったことのない労苦と喜びが待っているでしょう。

午後は作詞、作曲部門に別れ、それぞれ30分ほどの話のあと、実習を思い思いに行いました。各自キーボードを前にして作曲に挑戦する人の楽譜の書き取りを委員が手伝ったりしましたが、初めて自分を客観化する経験をし、そこで難しさを感じられたと思います。作詞ではミーティングの話などが行われ、実際に4節まで仕上げることのできた方があつたので、閉会の時にご紹介しました。賛美歌創作はほとんどの人にとって未経験の分野だけに、今回の研修では、あら、できた、という喜びと自分と向き合う困難を同時に感じさせられるものであったでしょう。教会の賛美歌を作るには事柄に向き合ってたくさん勉強し、努力が必要とおもいますが、それは大変創造的な作業なので、ぜひ祈りつつ挑戦していただいて、それを持ち寄って喜び合うことを実現したいです。

参加者の感想抜粋

- ◇ 本当に豊かな学びをさせていただきました。教会を共に建て上げていく、創造的なわざがさんびを創作するということを通して、とてもワクワク、身近にイメージさせていただきました。会衆賛美を豊かにというテーマは大変興味ある課題です。これからも楽しみにしています。
- ◇ 賛美歌が時代と共に変化していったことや賛美歌づくりが、一人の思いではなく、会衆に受け入れられ共に賛美するという視点をいただき感謝。
- ◇ とても素晴らしかった。スリリングで刺激的。機会を設けて他の方にも聞いていただきたい。『新生讃美歌』の性質が学べた。私たちは賛美歌が作れるという励ましを受けた。それが伝わってきた。私たちが再び教会へ向かわされることは厳しい課題でもある。
- ◇ とてもすばらしかったです。刺激をたくさん受けました。自分が賛美歌を作るなんて・・・と思っていましたが、みんなで共につくり上げていく、というのはすてきだなあと思いました。ありがとうございました。
- ◇ 今までのバプテストの賛美歌の歴史、課題などから今私達に求められている創作賛美の必要性など、とてもわかりやすくたくさんのことを聴くことができ、感謝です。会衆のため、教会形成を意識したり創作賛美ということで全く経験のない私にとっては少しハードルが高いようにも思いますが、逆に、目的、必要を求められ、創作する機会を与えられるのかもしれません。
- ◇ 作詞のテクニックとともに、賛美歌で宣教のまとめ(答え、結論)を入れないetc. 勉強になり、参加してよかったです。ありがとうございました。

「基調講演」要旨

基調講演： 岩崎光洋（自由ヶ丘）

要旨作成： 加藤美代子（姪浜）

当委員会は、今回の研修会での学びを各教会に持ち帰り、今後更に同じような研修会で深めながら、実際に多くのみなさんと賛美歌創作に挑戦していただきたい。今回の趣旨は「自分の証・自分の歌」ではなく「会衆の歌」を作りたいということである。

現在連合内でもよく使われている『新生讃美歌』の歴史を学んでおきたい。「すでにあるもの（賛美歌）を作る必要はない」（複数の賛美歌作家もそう主張している）からである。

1955年の連盟総会では、伝道集会用の歌集を継続的に作成し、将来これをまとめるとの方針を立てた。そのため、前身となった「新生讃美歌・II・III・IV」（1957～1984）は、その性質として礼拝で使う「（呼び出された民としての）私たちのことば」と求める賛美歌集ではなかった。1989年、その方針を転換し、礼拝での使用に耐えるものをということで「新生讃美歌1989年版」が発行された。そして現在の2003年版発行に至る。「伝道集会用」にフォーカスが当てられてきた30年間と「礼拝用」にフォーカスが当てられた10年では、費やされた時間量から考えても、「わたし」主語のものが多くなってしまうのは当然とも言える。

これから賛美歌で必要とされるのは、「教会」・「私たち」を主語とする賛美歌である。内容としては「礼拝と共にささげる喜び」、「今回の震災の体験を経ておこされる賛美」、「10歳以下の子どもたちが歌うことをターゲットにした賛美歌」、「音楽ジャンルの隔てを取り持つような賛美歌」、伝道観の変化により、「『神の宣教』という視点に立った賛美歌」などが作られて良いと考える。

では実際に作るにはどうしたらいいのか。準備と地味な努力が不可欠である。まず、良い作品（良い歌詞・良いメロディー）にたくさん触れること。聞いたことのないものは自分の中からでてこないからである。そして、今ある賛美歌をいろんな角度から分析する。

年間のどんな時期（教会暦を参考）の礼拝の、どんな場面で歌うのかを計画する。それには礼拝の各要素の意味をよく理解しておく必要がある。ひとつの賛美歌の中でいたずらに起承転結をいれこむと礼拝で使いにくくなるので避ける。

教会の歌を作るのであるから、自分の信仰・主義主張を書き連ねるのでなく、教会員の声を聞き、自分を知り、神様のことを深く知り（説教を熱心に聞き、聖書を読む）、教会が建てられてある土地や地域の実態をよく知ることが必要である。教会員の思いを聞き取ることは賛美歌作家の使命であり、自分の経験を超えた賛美歌を書くことを期待されている。そして書くときはなるべく具体的に、何を書くかを絞る。それはイエス・キリストがまさに目の前にいるひとりの人と深く関わられたのと同様である。

最後に自分で、そして教会のメンバーとともに推敲する。批判するメンバーは作ってくれる人への敬意と感謝を持って、マナーとエチケットを守ることが大切である。

大事なのは書き続ける努力である。最初は稚拙であっても構わない。がんばって書いたのに歌われない場合もあるが、それには執着しないようにして次に進もう。あきらめないでまた挑戦しよう。賛美歌創作は必ず教会形成につながる業である。

「自分ひとり」ではなく「民」として声をあわせて賛美するために、私たちは創造された（詩篇102：19）。本来「創造」は神にしかできることであるが、賛美歌創作はそれにならう、まことに創造的な業といえよう。

作詞部門ワークショップ報告

連合教会音楽委員 踊 真一郎（久留米）

作詞ワークショップでは実際の作詞に取りかかりました。その際、改めて今回の贊美歌創作は参加してくださった方々の属する教会の礼拝で歌われる贊美歌であることを説明した上で、以下のような創作のヒントや注意点を補足させていただきました。

- ・どの聖書の御言葉に根ざしているか。御言葉の理解の仕方によって、実際の歌詞の持つ広がりや方向性が変化していく。
- ・礼拝プログラムのどこで歌われるものであるかによって、詞の性格が変わってくる。
- ・共に歌う会衆を思い浮かべた時、「わたし」ではなく「わたしたち」と複数になる。また、共に歌う者に子どもたちがいるならば、彼らとも歌詞を分かち合えるような言葉使いになる。
- ・各教会の立てられている地域の歴史や課題、また各教会の置かれた状況に根差した贊美歌だからこそ言葉は力を持ち、共感を産む。
- ・言語上の諸注意（不快語・差別語・天皇制から来る言葉等）とミーター、韻律や言葉の抑揚、分節を揃えると曲と合わせやすい。

参加してくださった方々は2時間半集中して、歌詞を紡ぎ出しておられました。

今回の詞は未だ個人の作った詞ですが、教会の皆さんとの対話の中で教会の方々の思いも加わり、「わたしたちの」詞となることを願っております。

作曲部門ワークショップ報告

連合教会音楽委員 伊藤 聰（篠栗）

作曲部門ワークショップでは、

- 会衆贊美的音域は、1オクターブプラス3度以内が基本で、歌いやすさを目指すこと
 - 歌詞の意味に合わせてどこに抑揚をつけるか、どこに盛り上がりを持ってくるか
 - 神学的には作詞が重視されるが、作曲はメロディによって人の魂に決定的なインパクトを与え、刻み込まれていくのだから、同じぐらい重要なことも言える
- といったレクチャーを最初にいただいてから、用意していただいた歌詞をもとに、すぐピアノの前に座って自分の内面と向き合いながら時間一杯まで作曲に取り組みました。

もとより作曲は、高校の時以来で、歌詞にメロディをつけ小節ごとに組み入れようとするといくつかが字余りとなり、譜面化することに苦心しました。講師の助けを借りながら、なんとか時間ぎりぎりで完成することができ嬉しかったです。しかし実際に歌ってみたらまだ改善の余地があるなと感じました。贊美歌創作は、私が考えていたよりもずっと困難な作業でした。

来年1月には教会音楽井戸端会議が開かれ、教会形成をテーマに贊美歌創作の発題を私が行うことになっています。それまでにさらに学んで、少しでも良い贊美歌を創作してゆきたいと思います。